

## 現代史研究の意義

「現代史研究の意義」を論じることは、そのまま「現代史研究の困難」に向き合うことを意味する。このような感懐を持つのは、学部学生の頃に数年間留学した英国の大学で、最初に与えられた課題の一つが A.J.P.テイラーの《第二次世界大戦の起源》<sup>1</sup>であったことを思い起こすからである。1961年公刊のこの本は、欧米の現代史学界に一大センセーションを巻き起こし、その余燼は70年代末の私の留学時代にもなお燻り続けていた。著者テイラーは、ヒトラーこそ第二次世界大戦を引き起こした張本人とするトレヴァーローパーやホーファーなど「正統派」の解釈を痛烈に批判し、戦争の勃発は双方の側の外交的失敗の帰結であると主張した。ヒトラーやナチズムの異常性をことさらに強調するのではなく、徹底的な機会主義者としてヒトラー像の修正を試みたテイラーの議論は、ヒトラーに「一分の理」を認めるものであり、当然ながら激しい反論を招いた。在英中、論争の主演であったテイラーやトレヴァーローパーにそれぞれ直接面識を得る機会に恵まれ、彼ら大先達とのとりとめない会話の中から強烈に印象付けられたことこそ、「歴史的客観性とは何か」という大問題であり、これに関連する「同時代史の難しさ」にほかならない。

歴史の現場証人が多く生存し、それら目撃者の錯覚も多々あるに違いない「近い過去」をテーマにする場合、それが余りにも生々しいことに由来して、歴史家が下す評価に対して様々な批判がなされるのは、蓋し当然である。そこでは歴史家は、歴史に対する超越的態度と、過去に対する道徳的評価の問題との間の鋭い緊張関係に懊悩せざるを得ない。まことに、『客観性』が苦闘の末にかちとられる時にのみ——もしそれが党派的感情を克服しようとする懸命な意識的な苦闘の結果であるときにのみ——価値あるものになる<sup>2</sup>のであろう。歴史の評価とは、多かれ少なかれ過去の出来事を現在のわれわれが裁くことなのだとすれば、そこに何よりも求められるのは、裁く自らの立場を厳しく批判し再批判する精神の自由でなければなるまい。内藤湖南が《近世文学史論》<sup>3</sup>の自序に記した次の一節を想起する所以である。

汝をして汝が論ずる所の時に処し汝が方ぶる所の人と伍せしむ、  
汝果たして能く頭地をその間に出し、翰を操して其人と周旋し、  
其時を文飾するに足るか、汝自ら力を量らず、而して敢えて妄りに  
前輩を是非するかと、之が為に懊悩半日

(現代史研究所幹事 池田明史)

<sup>1</sup> A.J.P. Taylor, "The Origins of the Second World War", Middlesex: Penguin Books, 1961

<sup>2</sup> H.S. Hughes, "History as Art and Science", 1964, 川上源太郎訳「歴史家の使命」177頁

<sup>3</sup> 内藤湖南全集、第一巻、筑摩書房

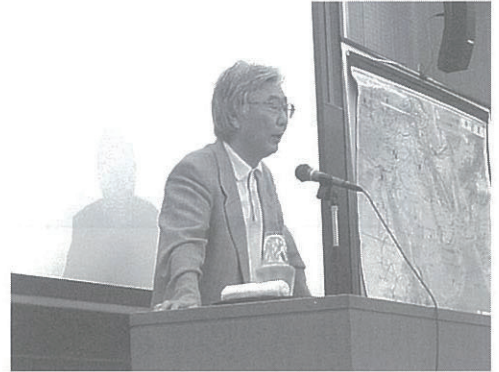


現代史研究所・生涯学習センター共催講演会  
テーマ『中東で考えたこと—異文化理解の一視点』

講師：小畑紘一氏

2006年6月29日

東洋英和女学院大学にて



「中東で考えたこと—異文化理解の一視点」と題された小畑紘一・元大使による講演は、国際社会学科の学生たちが主な聴き手であることを念頭に、異文化を理解することの難しさと面白さ、そして大切さを、具体的かつ平易な語り口で伝えるものとなった。

講演の冒頭において、小畑氏は中東のもつ多様性について、スライドを用いながら、都市も、砂漠も、緑もある風景を写し出し、聴衆サイドのステレオタイプ化された中東像にまず修正を迫った。また、宗教という側面からも、中東ではイスラム教、キリスト教、ユダヤ教などの諸宗教が入り乱れており、非常にバラエティーに富んだ地域であることに言及する。さらに、民族的な面から、セム語族系以外に、ペルシャ系やトルコ系、その他アルメニア人やチェチェン人までもが住んでいる事実も指摘して、その地域的多様性についての説明を裏づけた。

次に、現在のアラブ社会の混迷、不安定さといった点に議論は展開していき、その不安定要因に関しては、主にイスラム教自身およびアラブ国家自身に目を向ける見方が提示された。例えば、世の中の変化や現状に合わせて法解釈をしようという考え方に対して、イスラムにとって理想的な社会とされる7世紀前半を想い、「原点に返れ」という考え方が根強く存在していることである。また、アラブ国家が現実には国民に幸福をもたらすことができず、過去においてもアラブ人が帝国をつくった歴史がほほないことも指摘された。

最後に、小畑氏は、主に学生たちに向けて、できるだけ早く、思い切って海外に出てみることを薦める。そして、異文化と接した時の驚き、違いを見極めていくことの重要性、「日本とは?」「日本人とは?」「自分とは?」といった素朴な問いかけの大切さにふれ、その論を結んだ。



(現代史研究所幹事 望月敏弘)



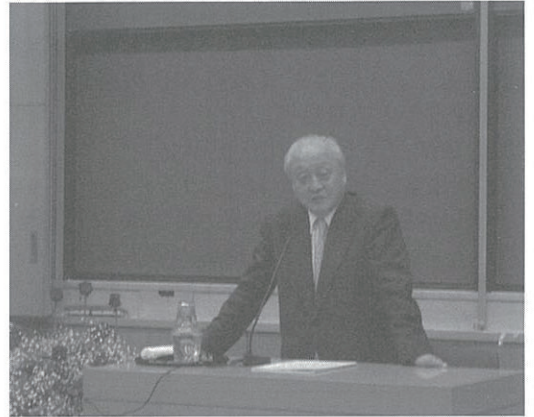
## 現代史研究所・生涯学習センター共催講演会

### テーマ『米国中間選挙後の日米関係』

講師：柳井俊二氏

2006年12月7日

東洋英和女学院大学にて

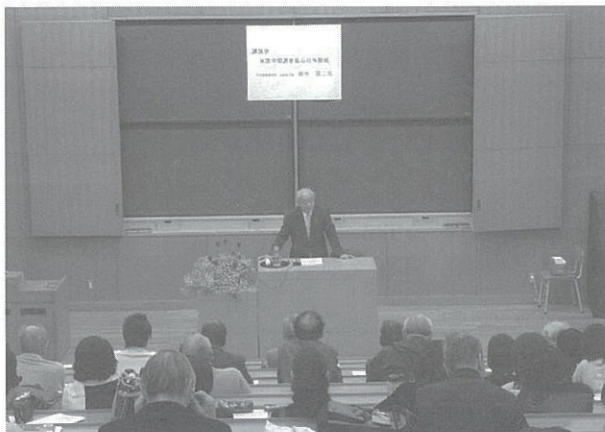


2006年12月7日（木）夕刻、東洋英和女学院大学の現代史研究所と生涯学習センターの共催による「米国中間選挙後の日米関係」と題する講演会が横浜キャンパス 8101 教室で開催された。講師は元外務事務次官・駐米大使等を歴任した柳井

俊二氏（現在、中央大学法学部教授・国際海洋法裁判所裁判官）。講演会は飽戸弘学長の挨拶、栗林忠男現代史研究所所長の講師紹介の後、研究所幹事の望月敏弘国際社会学部教授の司会で進められた。時期的に米国中間選挙の直後でもあったため講演に対する関心は高く、多数の社会人・学生を交えた約 110 名の聴衆が熱心に聴き入った。

講演の内容は、「ブッシュ大統領の敗北」、「議会の勢力逆転の影響」、「外交政策に対する影響」、「クリントン政権とブッシュ政権との比較」の四つの柱からなり、それぞれについて、講師の豊かな外交経験に基づく鋭い分析が、軽妙なエピソードを交えながら加えられた。とりわけ、民主党勢力が上院・下院・州知事で優勢を占めた今回の中間選挙の結果を受けて、それが今後の米国の外交政策に与える影響を、対日政策、イラク政策、北朝鮮政策、中国政策などの幅広い見地から予測したこと、また、日本との経済摩擦、安保関係、北朝鮮の核・拉致問題、日本と中国の重要度の評価、日本の経済政策に対する関与の姿勢など、対日関係におけるクリントン政権とブッシュ政権の様々な相違点を指摘しつつ、日米関係の過去と今後の動向を探ったことが興味深かった。

講演終了後に行われた質疑応答においては、社会人参加者達からの活発な質問とそれに対する講師の丁寧な回答があった。その反面、時間の制約もあって、学生参加者からの質問や意見の表明がなかったことが若干淋しく感じられた。最後に、今回の講演会を成功裡に支えて頂いた大学関係者の方々、とりわけ共催の労をとって頂いた生涯学習センターと広報関係の仕事を一手に引き受けて下さった学長室に感謝申し上げたい。



（現代史研究所所長 栗林忠男）

## 2007 年度に実施される現代史研究所 研究プロジェクト

### (1) 「戦後復員・引き揚げに関する総合的研究」

代表者：増田弘

共同研究者：加藤陽子（東京大学大学院）・佐藤晋（二松学舎大学）・浜井和史（外交資料館）

### (2) 「第二次上海事変（1937年）の研究」

代表者：望月敏弘

### (3) 「家族と子どもの生活史研究」

代表者：長谷川かおり

共同研究者：川崎末美・野口晴子・星順子・上笠一郎（児童文化研究者）・猿渡土貴（成城大学）・小林淑恵（慶応大学大学院）・湯沢雍彦（御茶ノ水大学名誉教授）

### (4) 「21世紀における国内移動・国際移動に伴うラテンアメリカ、インディヘナ青年の人生観・世界観の変容－メキシコ・グアテマラと米国－」

代表者：三橋利光

## 現代史研究 投稿要綱

1. 未発表のオリジナル原稿で、現代史研究関連領域（広く社会学・人間科学を含む）にテーマを持つ研究論文・研究ノート
2. 分量  
論文は、1万字以上、2万字以下を目安に作成してください。  
MSワード横書き文書横書き文書（図表、注、引用文献含む）、10ポイント活字、日本語MS明朝、英語は century
3. 提出形式  
MSワードファイルにて、[kaorih@toyoeiwa.ac.jp](mailto:kaorih@toyoeiwa.ac.jp) 及び [gendaiken@toyoeiwa.ac.jp](mailto:gendaiken@toyoeiwa.ac.jp) の両方に送付  
論文概要を9月末日まで、全文を11月末日まで
4. タイトル  
タイトルは35字以内、英文は15wordsまで
5. 要約  
英文要約を400words以内で作成し、キーワードを5つ選定
6. 章・節・項  
章分けは1. 2. 3. …とし、節分けは1.1 1.2 1.3、項は(1) (2) (3) とする
7. 図、表、写真  
図、表、写真には、それぞれ通し番号を、半角でつける。また、図、表、写真の下に出展を明記すること。 例) 図-1
8. 単位・数字・年度の表記  
数字は、半角のアラビア数字を用いる。(1 2 3など) 単位は、単位記号を用いる。( % kg km など)  
年度は、西暦を半角アラビア数字で記載し、必要なら年号などは ( ) で加える。
9. 注釈  
注釈は該当箇所の右肩に、全論文を通して番号をつけ、ページ下欄に脚注としてアラビア数字で記載する。
10. 参考文献  
参考文献は、論文末にまとめて番号をつけ記載する。  
例) 参考文献  
1] 中国年鑑編集部『劇場建築設計規模』(大修館書店 1986年)  
2] 清水博之「北京の芸術劇場政策」日本建築学会 東海支部研究報告集 1996年2月 pp.65- ~ 8

発行：東洋英和女学院大学 現代史研究所 神奈川県横浜市緑区三保町32

TEL 045(922)7272

FAX 045(922)7272

E-MAIL [gendaiken@toyoeiwa.ac.jp](mailto:gendaiken@toyoeiwa.ac.jp)